

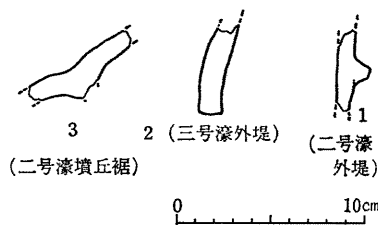
う努めるとともに、施工箇所において遺構遺物の発見に努めた。その結果、葺石や埴輪列などは認められなかったため、工事は予定通り施工したものの、後述するような遺物が採集されたので、ここに報告する。

なお、遺物は本誌前号で報告したⅡ層（後世の盛土）・Ⅲ層（崩落堆積土）・Ⅳ層（濠内の堆積土）から出土しており、Ⅴ層（原初の遺構）からの出土例は認められなかった。

今回、採集された遺物は埴輪一点、磁器二点、瓦一点の計三三点である。いずれも小片となっており、器表の摩耗が著しく、調整手法を明確にできるものは少ない。

埴輪（第27図1～3） 従来、本陵で知られている資料と同様の特色を有するものである。外面は灰褐色、もしくは淡い赤褐色を呈している。焼成はいわゆる埴質で、黒斑の認められる破片もある。胎土にはやや多くの小中砂粒を含んでおり、摩耗のため、器表に露呈している。突帯の形状が判明するものは一点のみである（1）。器壁の厚さに対し、突出度が比較的高く、上下辺のナデ付けが著しい。底部（2）の底面には縄目状の圧痕が認められる。3は朝顔形の口頸部の屈曲部付近であるが、突帯の形状は不明である。

磁器 二点とも一号濠外堤の濠側肩部から出土している。ともに染付



第27図 山辺道上陵の出土品（1/4）

の小片で、幕末前後のものであろう。

瓦 いずれも一号～三号濠の外堤から出土した。黒く燻した瓦で、なにかには玉縁を有する丸瓦がある。

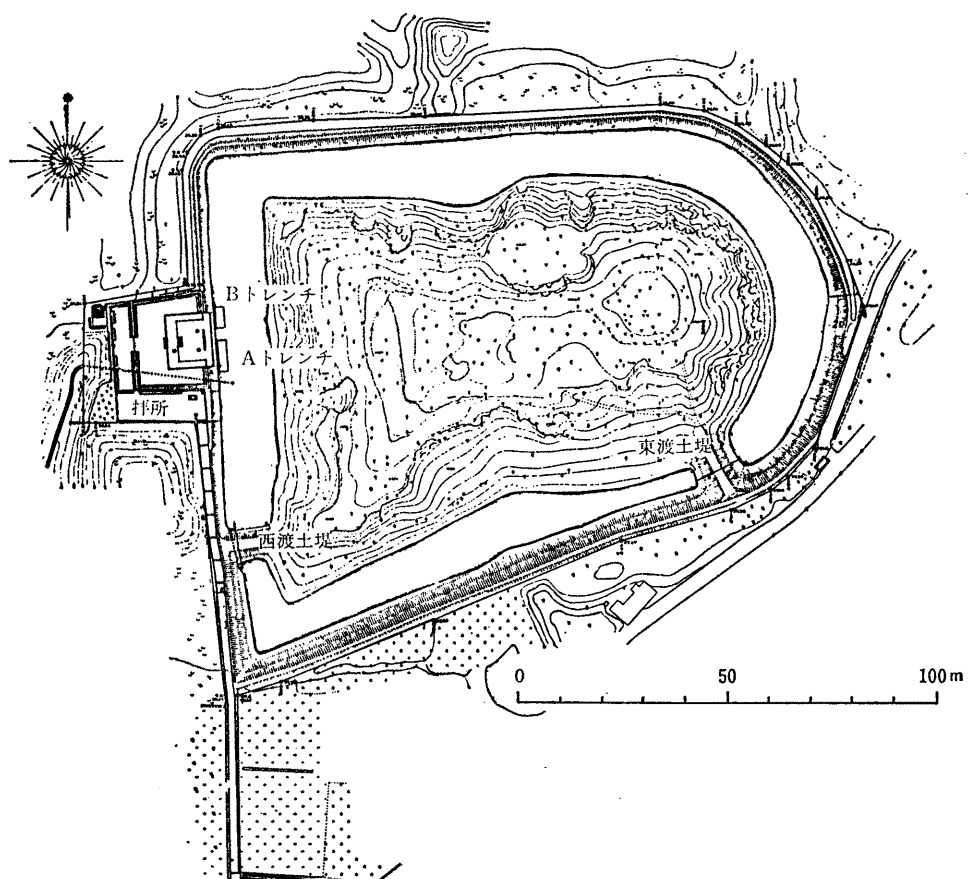
（福尾正彦）

平成 五年度 安閑天皇陵古市高屋丘陵整備工事 区域の調査

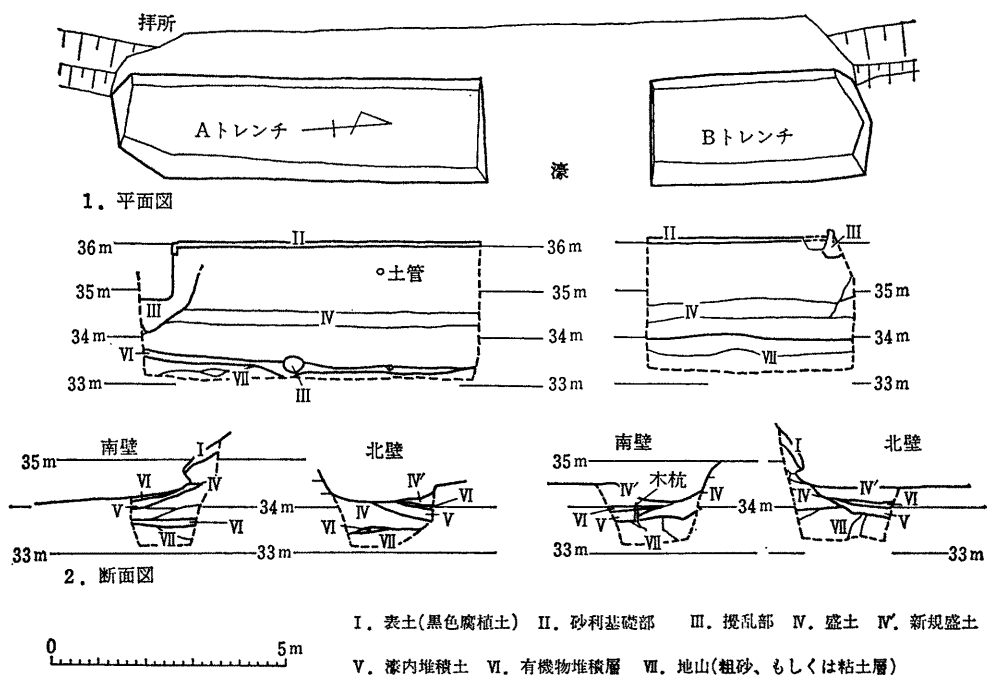
安閑天皇陵は、石川東岸に広がる独立丘陵を利用して営まれた前方後円墳である。応神天皇陵などで構成される古市古墳群の最南端に位置する。現在の墳長は一二メートルを計り、二箇所の渡土堤によって区画された濠がめぐっている（第28図）。

本陵においても永年の波浪等により、墳丘や外堤裾の浸食が進んできたため、護岸を主とする整備工事が実施されることとなり、平成四年度にそのための事前調査を行った。その結果は本誌前々号において報告したが、五年度は実際施工するにあたり、立会調査を行った。

調査の結果、墳丘や外堤裾部に関しては、事前調査に加える所見はほとんどないが、拝所の濠側部分において石積改修工事の基礎掘りが地山以下に及んだので、該所における成果を記しておきたい。また、一般拝所における排水管改修箇所においても新たな所見が得られたので、ここに報告することとする。



第28図 古市高屋丘陵調査箇所的位置 (1/1800) (現地形と変更あり)



第29図 古市高屋丘陵拌所石積改修箇所の平面および断面 (1/80)

なお、工事は予定通り竣工した。

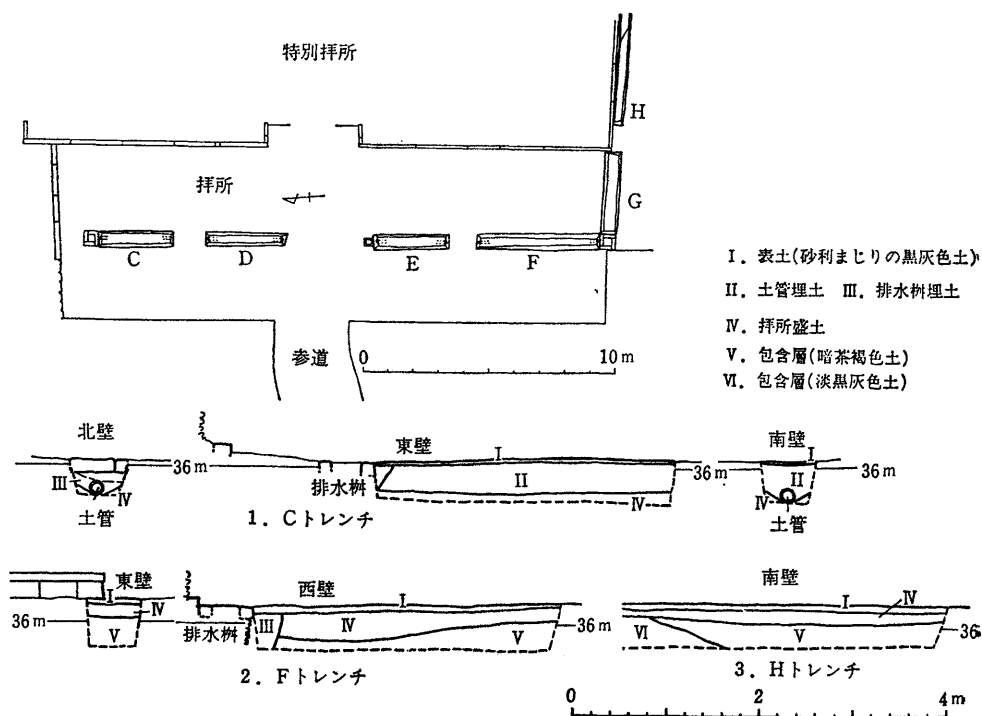
拝所石積改修箇所（第29図）

施工に先立ち、中途に三メートルほどのセクション・ベルトを残し、南側をAトレンチ、北側をBトレンチとし、調査を進めた。Aトレンチは長さ八メートル、幅二・四メートル、濠側での深さ一メートルほどを計る。また、Bトレンチは長さ五メートル、幅二・四メートル、濠側での深さ一メートルほどである。

地山は粗砂層、もしくは粘質土として検出された。いずれも固く締まった層である。検出レベルは三三・二四～三四・〇八メートルと、東西方向では北側の方が地山が高くなっている。Aトレンチではその上部に有機物を含む黒灰色砂質土が検出された。ある時期の地表面、もしくは濠底を示すものであろう。南北方向ではBトレンチ南壁の西側において地山の高まりが認められたものの、概して水平に近いレベルを保っている。Bトレンチ南壁における刃金としての黄褐色粘質土とその前端的木杭の存在は、ある時期外堤として機能していたことを証するものである。つまり、現在の拝所部は旧外堤部の上部に盛土して形成されているのである。遺物としては、埴輪一、須恵器一、陶磁器三点が盛土中から検出されている。

拝所排水管改修箇所（第30図）

一般拝所のほぼ中央部を南北に〇・六メートル幅で〇・五メートルほど掘削した。そのほとんどは過去に管を埋設した箇所の再掘削であった



第30図 古市高屋丘陵拝所調査箇所の平面図 (1/300) および断面図 (1/80)

が、南側の新規掘削箇所で、弥生土器・須恵器などを含む暗茶褐色土が約九メートルにわたって認められた。当該部分は、さらに南側に小丘陵があったことが知られており、その流れを示す土層であろう。弥生土器・土師器、須恵器の破片やサヌカイト剝片など一三一点が出土した。

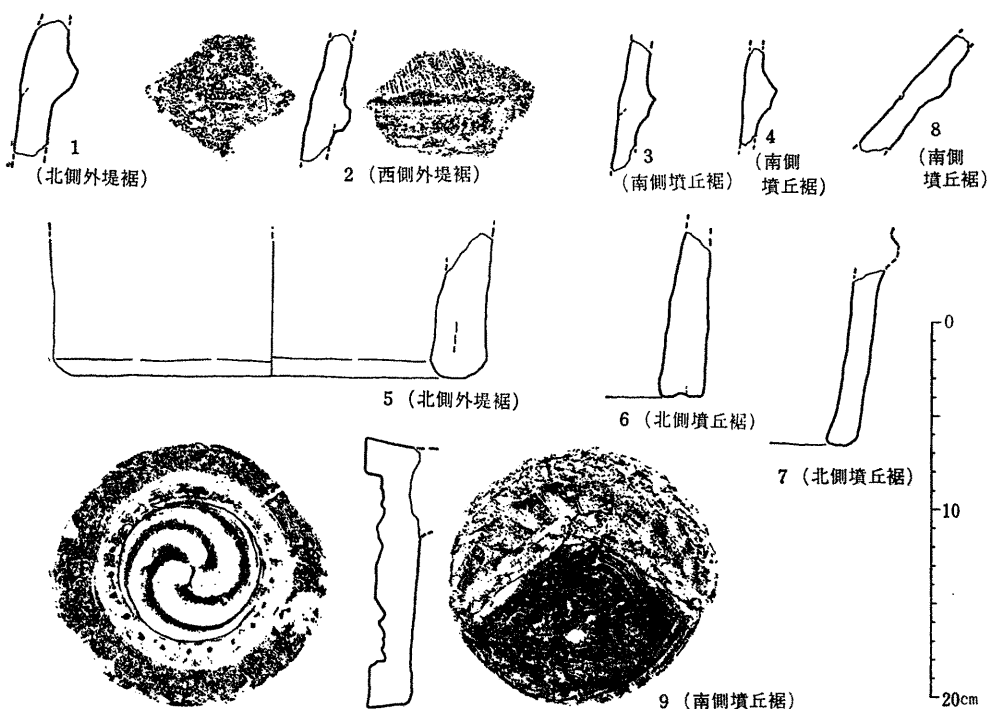
出土品

今回の立会調査に伴う出土品は墳丘・外堤裾部護岸工事に伴う出土品も併せて七〇〇点を数える。その約半数は埴輪片であり、その他弥生土器・土師器・須恵器・瓦の破片、さらにはサヌカイト剝片、五輪塔の空輪などを含んでいる。

埴輪（第31図1～8）

今回の調査で確認された埴輪の大半は小片となっており、図示できるものは少ない。また、いずれも摩耗が著しく、調整手法を明らかにするものもほとんどない。円筒形と、朝顔形がある。橙褐色系の色調を呈し、焼成もいわゆる埴質で、硬質や須恵質の製品は認められないが、黒斑の存在は確認していない。基本的には本誌前々号において報告した埴輪と同様の特徴を有するものである。

円筒埴輪には器壁が厚手の製品（1）とそうでないもの（2～4）がある。底部は総じて厚手（5・6）で、7のような製品は珍しい。5では底径約二センチに還元され、小型の製品となろう。突帯の断面は台形もしくはそれに近いもの（1・2）と、三角形に近いもの（3・4）がある。2は今回の出土の埴輪のなかで、唯一外面調整の知られる例で



第31図 古市高屋丘陵の出土品(1) (1/4)

ある。縦方向に近いナナメハケメの後、突帯を貼り付け、その上下を軽くナデ付けて仕上げている。

朝顔形として確認できるのは一点のみである。8がそれで、大きく開く頸部の一部であろうが、傾斜変換点は認められない。

弥生土器・土師器（第32図10～18）

弥生土器は壺・甕、高坏などがある。器形の判明するものはいずれも、第V様式に属するものである。

壺・甕（10・11、15～18）には口頸部（10・11）と底部（15～18）がある。17・18には粘土紐巻き上げ後、内面の粘土を引きのばして内部を充填した、いわゆる底部輪台技法が認められる。この両者の外面は粗いタタキによって仕上げられている。

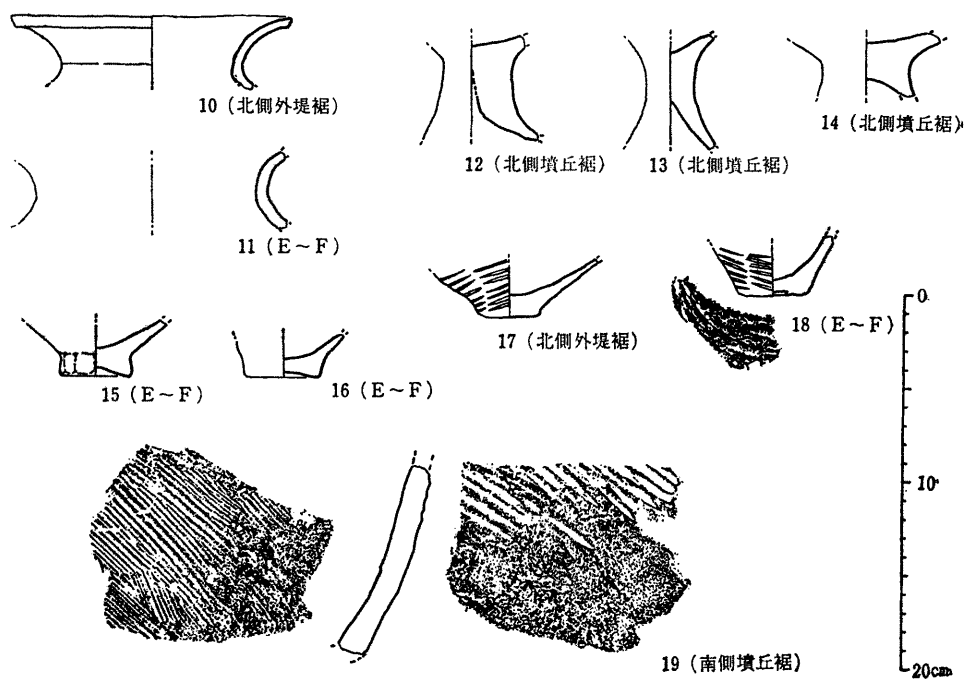
12～15は高坏の坏部と脚部との接合部と考えられるが、14に関しては台付甕の脚部付近の可能性もある。

土師器はいずれも薄手の極小片で、器形や調整手法等、詳らかにしない。

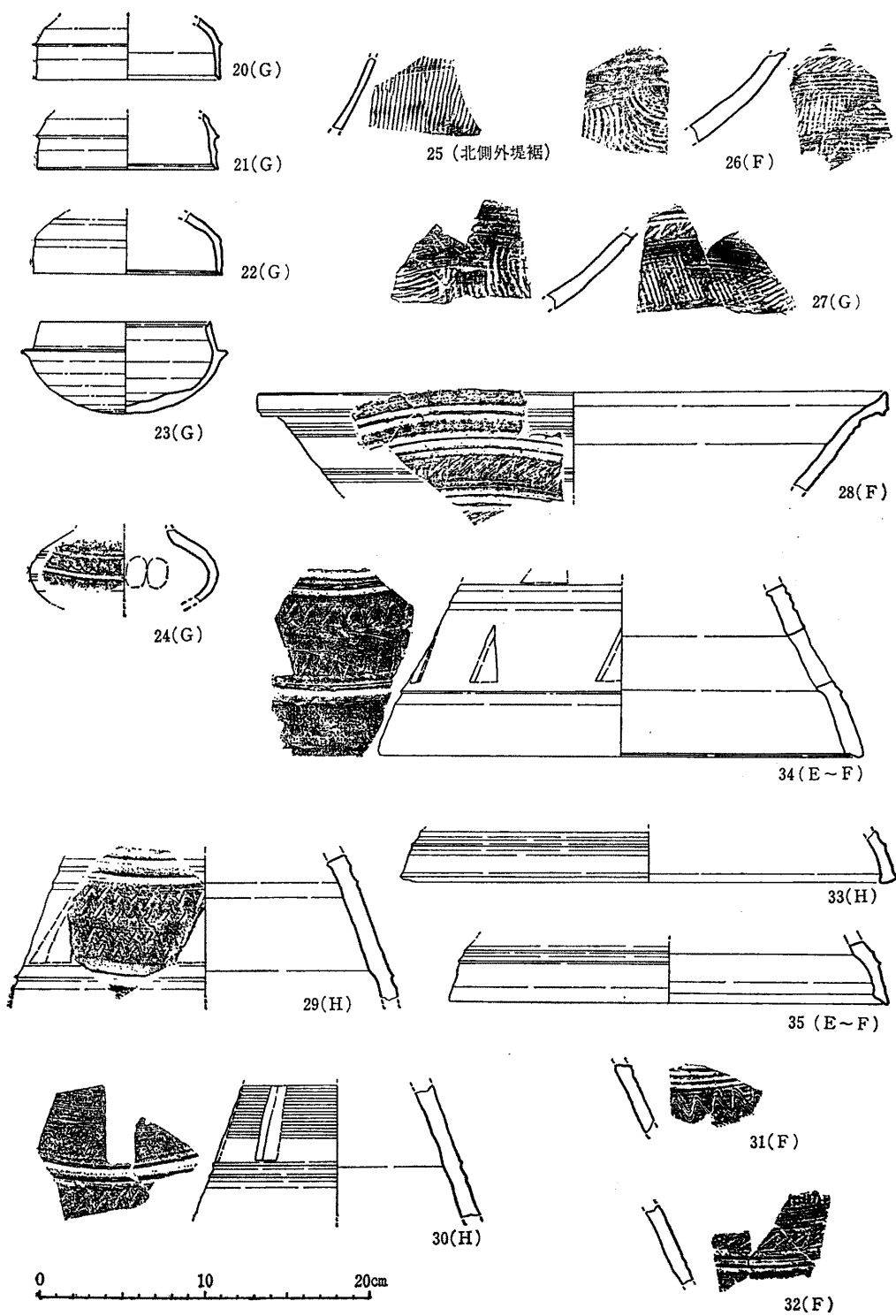
須恵器（第33図20～36）

須恵器は主に拝所排水管改修箇所から出土した。蓋坏、甕、器台、甕がある。破片の量としては器台が多い。

蓋坏には蓋（20～22）と身（23）がある。蓋は口径一～一二センチに還元される。ほぼ垂直にのびる体部と天井部との境には鋭く突出した稜を有する。口縁端部は内側に傾斜し、内面に段を伴う。身は丸みを帯



第32図 古市高屋丘陵の出土品(2) (1/4)



第33図 古市高屋丘陵の出土品(3) (1/4)

びた天井部をもつ。立上り部は内傾し、端部内面に段が見られる。最大径一二・二センチに還元される。

甕と器台は破片では識別できないものもあるため、一括して報告することとしたが、25は平行タタキの後、一部にカキメを加えており、器壁の薄さと併せて、甕といえるであろう。他は器台かと思われる(25・36)。口頸部は大きく開き、端部は上方に突出する(28)。二条づつの突帯間には櫛描波状文を施文する。26・27は坏部下半に相当するのであろう。29・35は脚部である。端部の形から三个体以上存したと考えられる。33の端部は断面四角。稜は鈍く、丸みを有する。35・35はともに接地面が外側にある。前者が安定した形状を示すのに対し、後者はやや不安定である。35は大きく八字形に広がり、三角形の透し穴が認められる。同形の透しは29にもあるが、30では縦長の長方形である。29・31・34・35の外面には櫛描波状文が認められる。31は施文以前に粗いカキメ、もしくは横位の平行タタキで調整している。35の突線以下は縄蓆文のタタキのち、ヨコナデを加えて仕上げている。一方、30では櫛描波状文のある上位の段にはカキメが認められる。

甕(24)はやや扁平気味の胴部の上半部の一部をとどめている。沈線間に櫛描波状文を刻するが、自然釉のため、凹凸はあまり認められない。外上方に短くのびる口頸部を有すると思われる。

土師質土器(第32図19)

いわゆる湊焼と呼ばれる甕の体部下半から底部に移行する部分であ

る。外面は上半を溝幅六・七ミリの粗いタタキ、下半をヘラケズリ、内面を四・六センチのナナメハケメで仕上げている。調整からは一六世紀代の手法と考えられ、^(註)本陵を利用して営まれた高屋城に関わる製品であろう。

瓦(第31図9)

17点出土している。いずれも黒灰色を呈する燻瓦である。軒瓦、平瓦、丸瓦がある。9は軒丸瓦で、尾が長くのびる三巴のものである。背面に丸瓦部との接合痕を明瞭に留めている。

(福尾 正彦)

註 土山健史「堺環濠都市遺跡における15・16世紀の土器について」

『中近世土器の基礎研究』V、一九八九年